

大学生の都道府県認識

－ 弘前大学教養部学生の場合 －

佐 藤 修

I はじめに

社会科地理に対する児童・生徒の嫌厭傾向が著しく強いことは、田中（1984）・八田（1986）などによっても報告され、すでに周知のところである。地理を暗記科目とみる傾向が強く、これが地理嫌いの大きな原因ともなる。しかし地理を学習する上で、地名や専門用語などを暗記することは避けられない。

そこで本研究では、「地名」の例として都道府県の位置や県庁所在地の名称を取り上げ、大学生が、それらをどの程度認識し、どのようなイメージを抱いているのか、また、小中高校生に対するこれまでの研究と比較して、現在の大学生の都道府県認識というものが、どの程度のものなのかを考察したい。

II テスト実施について

本研究では、弘前大学教養部学生 189 人に調査を行ない、有効者数 177 人（男：133 人，女：44 人）の回答を得た。

アンケート内容は、高橋（1985）の中中学生を対象にしたものと比較するため同じにした。

- ①道県庁所在地を知っているか。
- ②各都道府県に対してどのようなイメージをもっているか。
- ③アンケートに記入された日本全国の県境入り白地図と照合して、各都道府県の位置がわかるかを調べるものである。

①は、道県名と道県庁所在地名が異なるものだけを取り上げ、その地名に対して、なじみがあるかどうかを知る手がかりとする。

②は、各都道府県に対するイメージが、都道府県認識にどのような影響を与えるかをみるもので、回答は、選択肢ア～チより選び、そのほかにあれば書き加える複数回答にした。

③は、特に視覚的なものが、どのように、また、どの程度影響しているかを調べる。

III 都道府県の認識

(1) 地名認識

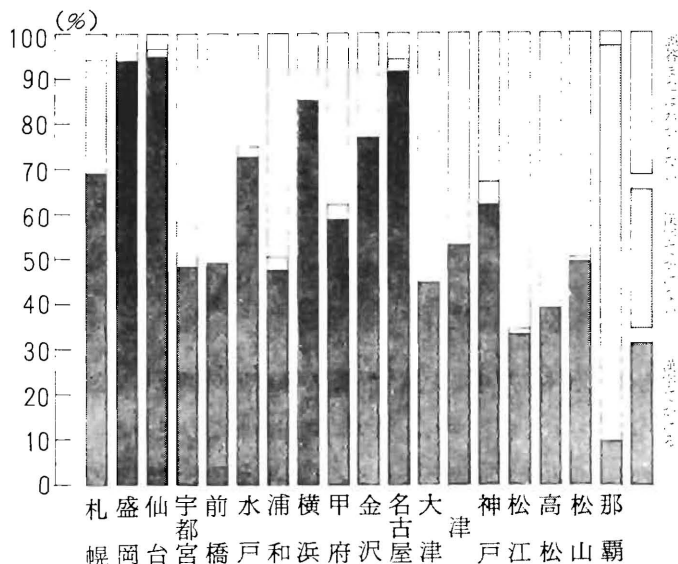
第 1 図は、道県名と異なる道県庁所在地について、それらの名称を知っているかどうかを図示したものである。

盛岡・仙台が高率を示す理由には、東北地方出身者の人数が107人と多いためもあると思われる。横浜の場合、都会的イメージや話題性が多いところから正解率を高めたと思われる。札幌・名古屋・那覇に関する高率は、視覚的影響やほかに迷う都市を知らないためもある。

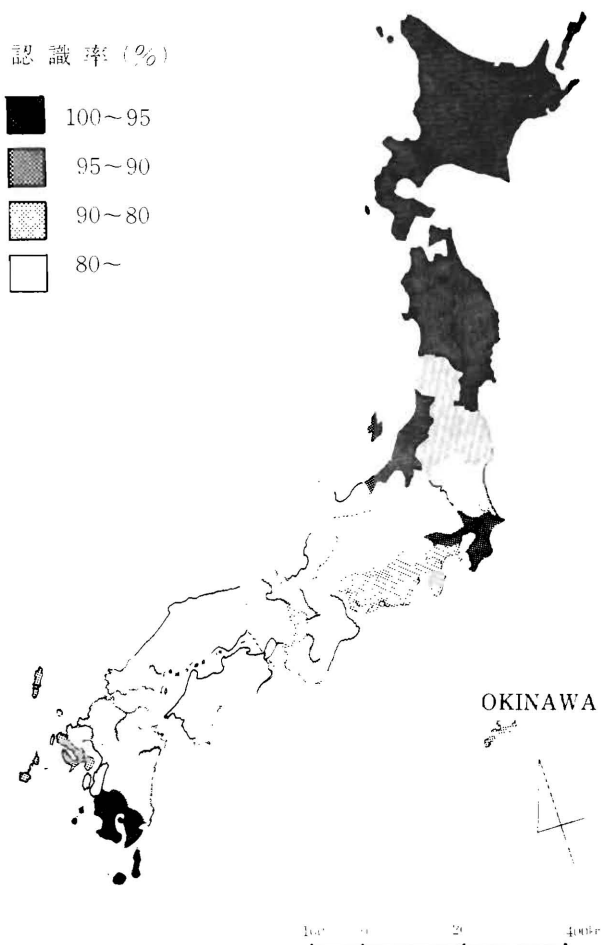
反対に、低い値を示す首都圏近郊には、県庁所在地と同規模か、それ以上の都市が多くあるために混同しやすい。例えば、群馬県の高崎、埼玉県の大宮・所沢などが挙げられている。また、松江・高松・松山や津・大津の場合、似かよった漢字によるあいまいな記憶が混同をもたらしたのと言える。

(2) 都道府県認識

第2図は、日本全国の県境入り白地図を与え、各都道府県と照合させた設問の認識率を図示したもので、57人(32.2%)が全問正解であった。島・半島や日本列島の先端部などは、視覚的に印象が深いためか、全体的に認識率が高い。そ



第1図. 道県庁所在地の認識率 (アンケートより作成)



第2図. 都道府県認識 (アンケートより作成)

れ以外に、宮城と東京は、話題性に富み、都会への興味・関心が認識を高めたと思われる。新潟は、田中角栄や上越新幹線・佐渡島の存在が認識を高めたと思われる。高橋の調査結果からも明らかに、ここには居住地からの距離も関係し、居住地に近い程認識率が高いことも証明されている。

逆に、認識率の低い県は、視覚的に印象のうすい内陸県か、日本海側や四国などである。特に島取・島根に関する認識は極めて低く、それぞれ、58.2%、59.8%と他県とは比べものにならない値である。この大きな理由として、形状の類似した隣りあう県で、話題性にも乏しいことがあげられる。

(3) イメージの影響

各都道府県に対するイメージ内容を、〈表〉にまとめてみた。これによると、大局的にみて、雪の降る地方に対しては、「寒冷」・「暗い」というイメージをつけたがり、西南日本には、「温暖」・「遠い」というイメージが強いようである。関東・関西の大都市圏近郊の地域には、「イメージなし」といった解答に集中し、東京・大阪などの大都市ばかりに、イメージが集まる傾向にある。認識率の低い県は、「イメージなし」といった解答に集中し、またそのような県に限って、「暗い」

・「停滞」とかのイメージをつけたがる傾向がある。

また、イメージ解答の中には、固有名詞や特産物で答える場合も多くあった。例えば、宮城の伊達政宗・茨城の水戸黄門・新潟の田中角栄・愛媛のみかん・徳島の池田高校・鹿児島県の西郷隆盛などである。このようなイメージも、認識形成に一役買っているように思われる。

(4) 高校社会での

地理選択別認識

高校の社会で地理を選択したか、しなかったかによって、どのような差異が表われるのかを調べたもので、第3図-a・bに図示した。

表.各都道府県に対するイメージ内容（アンケートより作成）

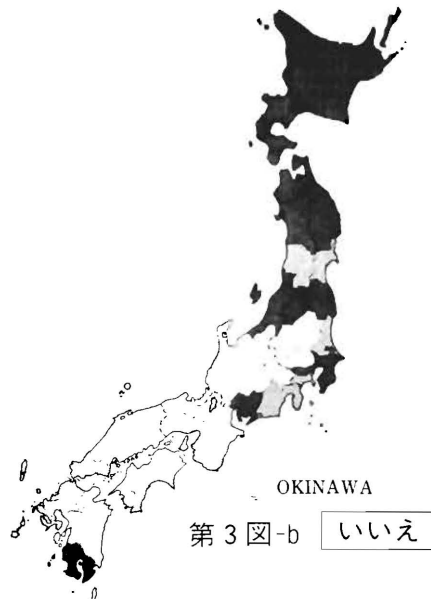
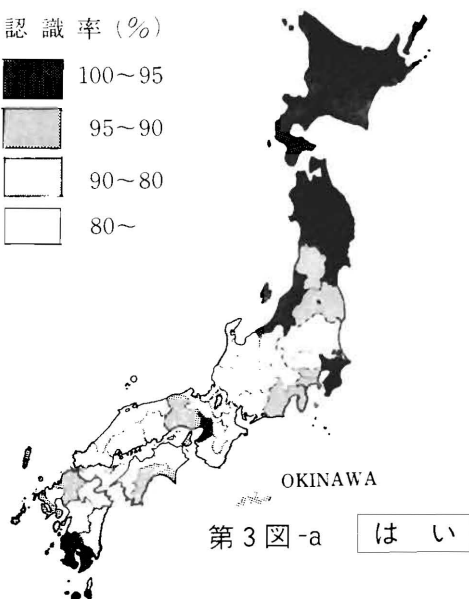
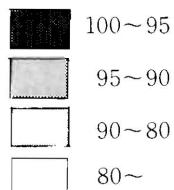
北海道	広大147、寒冷104、静か26、進歩的21	滋賀	イメージなし68、静か22、狭小17
青森	寒冷139、停滞59、暗い52、静か22	奈良	伝統的156、静か39、保守的28
秋田	寒冷81、暗い39、近い34、伝統的29、保守的21	京都	伝統的155、静か60、保守的49
岩手	寒冷85、広大54、保守的21、伝統的17、暗い16	和歌山	温暖67、イメージなし55、狭小21
山形	暗い62、寒冷57、停滞36、伝統的17、静か25	大阪	にぎやか123、繁華83、明るい43、現代的25、進歩的20
宮城	繁華59、進歩的29、イメージなし21、にぎやか17	兵庫	イメージなし30、繁華37、現代的36、にぎやか27、進歩的20
福島	イメージなし53、暗い24、寒冷20	岡山	イメージなし73、温暖45、遠い37
茨城	イメージなし70、静か17、広小14、暗い6	広島	進歩的32、繁華30、温暖26、イメージなし24、遠い21、にぎやか22
栃木	イメージなし71、静か18、停滞12、暗い11	山口	イメージなし82、遠い49、温暖18
群馬	イメージなし66、暗い16、停滞15、静か11	鳥取	暗い44、イメージなし43、静か26、遠い26、停滞17
千葉	進歩的40、繁華35、現代的27、イメージなし26	島根	イメージなし38、暗い53、遠い35、停滞34、静か18
埼玉	イメージなし37、現代的26、進歩的23、にぎやか20、暗い13	香川	温暖77、イメージなし61、狭小34、遠い31
東京	にぎやか104、現代的26、繁華97、進歩的75、狭小59、明るい25	愛媛	温暖125、暗い29、明るい29、イメージなし10
神奈川	現代的89、繁華・進歩的64、にぎやか62、明るい34	徳島	イメージなし64、温暖49、遠い27
新潟	寒冷95、暗い24、保守的23	高知	温暖111、遠い38、イメージなし20、明るい15
富山	イメージなし49、寒冷47、暗い23、伝統的21	福岡	温暖51、イメージなし45、繁華43、にぎやか42、遠い36
石川	伝統的82、静か33、寒冷28、暗い19	佐賀	温暖119、イメージなし74、遠い43、停滞14
福井	イメージなし93、暗い29、寒冷21	長崎	伝統的79、温暖55、遠い39、明るい33
長野	広大54、寒冷53、静か33、暗い26、イメージなし23	大分	温暖76、遠い62、イメージなし50
岐阜	イメージなし105、遠い12、暗い11	熊本	温暖91、遠い50、イメージなし31
山梨	イメージなし80、静か24、狭小11	宮崎	温暖115、遠い41、イメージなし21、明るい16
静岡	温暖93、明るい41、静か23	鹿児島	温暖111、遠い68
愛知	温暖50、にぎやか47、繁華42	沖縄	温暖143、遠い81、明るい30、伝統的27
三重	イメージなし105、温暖22、遠い11		

注)：()は人数 集計は複数回答で10人以上を対象

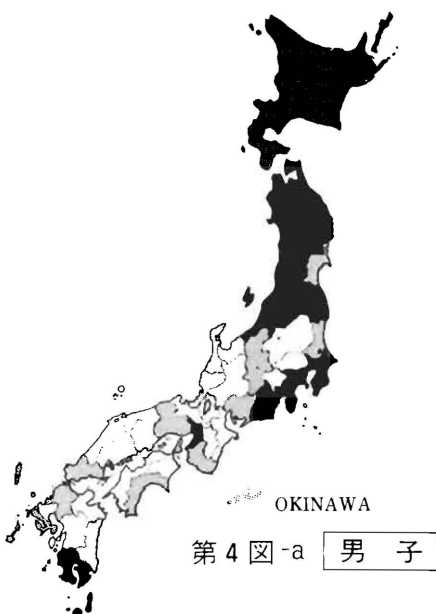
第3図-aの地理を選択した者の認識率は、第2図の全体の認識率とほぼ同じ傾向を示す。

逆に、地理を選択しなかった人達の認識は、一層の内陸県や隣接県との混同を招いている。ここで新しくあげるなら、奈良・京都、熊本・大分・宮崎の混同も著しい。奈良・京都に関しては、大部分の人が修学旅行で行ったことがあるにもかかわらず、その場所さえわからないとは、なぜかわしいことである。

認識率 (%)



高校社会での地理選択別認識 (アンケートより作成)



男女別認識 (アンケートより作成)

(5)男女別認識

男女の性差による認識の差異を比べた場合を、第4図-a・bに図示した。

女子に関しては、従来から、社会科・特に地理嫌いはよく言われ、田中（1984）の論文の中でも、女子の地理嫌いは証明されている。認識率が低いことと地理嫌いが、即むすびつくわけではないが、今回の私の調査からも、女子の認識が異常に低く、男子とは比べものにならない値を示している。

女子の場合、日本を東西に分けた時、西日本の認識が極めて低く、ほとんどは50～60％台である。最も低い値を示す島取に至っては、47.7％と半分以上の人がわからないことになる。沖縄に関しては、視覚的影響が強い地域にもかかわらず認識率が低いのは、沖縄と種子島をまちがえた人が多いためである。アンケート実施にあたり、沖縄だけは沖縄島に記入するように求めたため、このような誤答が多かったと思われる。

以上の結果から、高校で地理を選択せず、しかもその中の女子で認識が低く、形状の類似した隣接県や内陸県の間で混同が著しい。島取・島根に関する混同は、どの場合でも多く、今回のテストでは、日本で一番認識が弱い地域と言えよう。

Ⅳ 若干の考察

今までの調査結果をまとめてみると、小学校・中学校・高等学校と続いた地理嫌厭傾向は、大学生に至っても大きく尾を引き、特に女子の場合、地理への興味・関心の薄さがうかがわれる。地理に対する興味・関心を高めるためには、やはり、小学校時代からの考えさせる内容よりも、児童・生徒の興味にあった地理教材を十分に活用すべきである。例えば、今回の調査で、イメージ解答にあげられていた個人的意見などを手がかりとして、それをもとにさまざまな地域へ目を向けさせることも効果的であると思われる。現在の地理教育の結果が、今日の地理嫌いを生んでいることを考えれば、多少の工夫が必要であろう。世界でも注目されつつある日本において、自分達のまわりだけでなく、日本全国、ひいては世界各国にも目を向ける力を養わせることも、地理の重要な役割のひとつである。

Ⅴ おわりに

本研究では、大学生の都道府県認識を調べるために、アンケート調査を行なったが、その結果、次のようなことが言える。

1. 認識には、居住地に近いということのほか、視覚的な影響や歴史的背景またはイメージが大きくかかわっている。
2. 視覚的影響によると思われるが、島・半島や日本列島の先端部地域の認識が強い。
3. 形状の類似した隣接県や内陸県または話題性に乏しい県は、認識が弱い。
4. 女子の認識が極めて低い。
5. 中学生と比較した場合、大学生の認識率は多少上昇するが、同じ傾向を示す。

今回の調査では、弘前大学教養部学生だけを対象としたため、出身地別人数に大きく偏りがあり、これを一般的傾向として延長することはできないが、一資料として、今後の地理教育の発展に貢献できれば幸いである。

最後に、本論文を作成するにあたって、多くの御指導・御助言をいただいた後藤雄二先生・水野裕先生、アンケート実施にあたり御協力いただいた今井敏信先生に、心から感謝いたします。

【参考文献】

○高橋桂子（1985）：中学生の都道府県認識

お茶の水地理 第26号，36～44

○田中耕三（1984）：社会科地理学習への嫌厭傾向とその対策に関する研究

新地理 32-3，1～13

○八田二三一（1986）：中学・高校の社会科教育における「世界」認識の方法に関する一考察

新地理 34-2，1～13